

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録, インドネシア・ガジヤマダ大学での集中講義と歴史探訪
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 114, No. 8, pp. 28-29
Citation(English)	, Vol. 114, No. 8, pp. 28-29
発行日 / Pub. date	2017, 8



知財見聞録

インドネシア・ガジャマダ大学での集中講義と歴史探訪

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

インドネシアの名門：ガジャマダ大学

1949年に設立されたインドネシアで最も歴史のある国立大学の一つといわれるガジャマダ大学で集中講義があり、出かけてきた。筆者を招いてくださったのは、同大学法学部の先生で、国際学部プログラムの責任者を務めるMs. Dina W. Kariodimedjoである。筆者の長年の友人であるすてきな方だ。

ガジャマダ大学は、ジャワ島中部南岸のジョグジャカルタ特別州に本部を置く、18の学部を持つ総合大学で、学生数は5万人を超えるという。インドネシアでは最上位にランキングされる優秀な大学である。

東京工業大学でも2000年から大学間交流協定を締結しており、また、日本の他の大学も多様な研究交流等を進めてきている。さらに、日本政府も、医学・農学系の7学部を整備拡充するため、ODA予算を使って新校舎の建設や機材機器整備、大学教官の日本への留学および短期研修などの支援をしてきた大学である。

地域王室制度が存続するジョグジャカルタ

ジョグジャカルタ特別州は、インドネシアでは唯一、地域王室制度が存続しており、現代においてもスルタンが州知事に就いている。

現スルトンのハメンクブウォノ10

世は5人の子どもが皆女性で、男子がおらず、継承問題が懸念されていたという。それまで、当地の歴代スルタン10人は全て男性で、「正室の長男を充てる」という内規があったそうだ。ハメンクブウォノ10世は毎日新聞の取材に対して、「王室制度も男女平等を定めたインドネシア憲法に従わなくてはならない」と述べるなど、王女にスルタン位を継承する意向を示しているが、異母弟が反対を表明するなど王族内には異論があったようである。

スルタン州知事の今後については、他国の立憲君主制、文化、歴史等も考慮しつつ、ガジャマダ大学の法学者や有識者を交えて審議中とのことだ。

学部生を対象にした集中講義

今回の筆者の講義は、国際学部プログラムに参加している学部生が対象で、参加者は約80人だった。まず「知的財産権とは何か」から始まり、インドネシアの産業界、特に中小企業の発展に寄与する知的財産権の活用法を解説し、ある中小企業の事例に基づいてどのように知的財産活動を進め、企業を成長させていくかという課題に関するグループディスカッションを促すものだった。

2日間にわたる集中講義だったが、学部の若い学生たちは、実に新鮮で、活力に満ち、知識の吸収と将来への挑戦に高い意欲を持っていた。最後のグ

ループ発表の姿は、日本での筆者の講義の受講生に見せたいほどの熱気だった。発展している国は大学のなかでも熱気がすごいなぁとうらやましく感じるとともに、筆者も一瞬若返ったような気がした。グループディスカッションになると、筆者も各グループを回って学生たちと議論した。

はあり 羽蟻と過ごした2晩

3日間の滞在中は、大学内のゲストハウス（教授が以前生活していた大きな一戸建ての家屋が転用されている）で過ごした。広大なキャンパスのメインストリート沿いにあり、ゲストハウスを維持・管理するために雇われている管理人の家族の住居が隣接している。困り事があると相談に乗ってくれる管理人ではあったが、部屋にいた羽蟻のような虫の退治のために殺虫剤を



講義風景



学生に交じって議論

持ってきてほしいと頼んでも、意味を理解してもらえず、我慢した思いが残っている。

キャンパスから出て殺虫剤を買いに行ける場所もない。夜になるとどこからともなく羽蟻が舞い込んでくる。日本のように、昆虫などから隔離された空間を確保している都市型生活にどっぷりと漬かっていると、自然界に飛び出すのは難しくなるような気がした。

メラピ山の噴火跡

2日目の講義が終わると、メラピ山(Gunung Merapi)の噴火による火砕流の跡地に連れていってくれた。「火の山」を意味するメラピ山は、ジャワ島中央部にあるインドネシアで最も活動的な火山として有名で、ほぼ一年中噴煙を上げている。1548年以降は70回ほど噴火しており、近年では2010年の

噴火が、地域の人々に甚大な被害をもたらした。

10月25日、大規模な火山性地震が発生すると、メラピ山の警戒レベルは最高度に引き上げられ、山頂から10km以内の地域住民には避難勧告が出された。結果としては、同年11月23日時点で、死者322人、避難者13万人という大被害となった。

案内してもらった場所は、ほんの一部の被災地だが、火砕流による焼け跡が痛々しく残っていた。亡くなった方々へ手を合わせてお祈りをささげてきた。

なぜ筆者をここに連れてきてくれたのだろう。地震や災害が多い日本人に対して、大きな災害を受けているのは日本だけではなく、インドネシアでも同じだということを知ってほしかったのではないと思った。

ラトゥ・ボコ遺跡

ジョグジャカルタ近郊の人気観光地は、郊外に所在する2つの世界遺産、ボロブドゥール遺跡とプランバナン寺院群。市内から日帰り可能な距離だが、数時間しか時間を取れない筆者のスケジュールではとても訪問できないということで代わりにご案内いただいたのが、ラトゥ・ボコ遺跡(Situs Ratu Boko)と呼ばれる8～9世紀ごろに建てられた宮殿の跡地であった。

市内に点在する寺院やメラピ山が望

める素晴らしい景色に囲まれた丘の上にあり、夕日の名勝といわれる大変ロマンチックな場所である。実は、笑顔のすてきなDina先生が私と二人で真っ赤に染まる夕日を見に行きたかったのではないかと後になって推察している。それほどきれいな日没を堪能した。

この遺跡は、古マタラム朝のラカイ・パナンカラン王が王位を引退し、仏教へ専念するために建造した施設が前身とされるヒンドゥー・仏教遺跡である。遺跡内には如来像などの仏像も祭られている一方で、ヒンドゥー教のドゥルガ像やガネーシャ像なども見られ、当時の仏教文化とヒンドゥー文化が共存していた様子がわかる。

さらに、遺跡内には、城壁や堀の他、テラスや沐浴場もくよく、池、ミニ寺院、瞑想めいそうのための洞窟等にジャワ建築の跡も見られる。

Dina先生の説明によると、当時の国王が、宗教を超えていろいろな思想、感情を持った多くの人々が遠慮なく集まれるお寺を造ったということであった。いまだに機能的にも解明されていない不思議な遺跡だが、素晴らしい王様であったようだ。

今回も、私の知らない多くのことを教えてくれた旅となった。Dina先生、ありがとう。広いインドネシアには、多くの文化が存在している。また新たな出会いを楽しみにしている。



メラピ山の溶岩で焼き尽くされた動物の骨



ラトゥ・ボコ遺跡にて